

譚
綴

光秀と信長

九谷 六口

二〇〇五年十月五日



淡い月の光の下、眩いばかりの光を放つ安土城天守閣。

天正十年三月十日夕方、その本丸の広間上座に織田信長、脇に森蘭丸、下座に明智光秀がいた。

「殿、朝廷より再三再四、三職推任の勅使が参っております。関白、太政大臣、征夷大將軍、殿の望み通りと申しておりますが」

「捨ておけ。朝廷よりも天下の方が上。官位など冀の役にも立たん」

「お言葉ではございますが、朝廷を蔑ろに、この国を治めし業は困難と思われませんが」

「判っておる。天下統一には朝廷が必須。そちに命じ、誠仁親王親子を二条御所に移徙、さらに五宮を余の猶子にした。おぬしは智略に富んだ男。難なく遣り遂げた」

「ははー」

「おぬしには、その目的が判るはずじゃ。申してみよ」

信長の意味ありげな問いに、いつも通り下を向く光秀。

「何を躊躇っておる。構わぬから申せ」

「恐れながら……正親町天皇に讓位を迫り、親王を天皇に……」

行く行くは殿のご猶子、五宮様を天皇に……」

「ここまで口にした光秀が黙った。

「光秀、話が途中であろうが。で、どうなるのじゃ」

おもむろに口を開けた光秀、

「五宮様は、殿のお子。殿は治天の君。つまりは、上皇として天下を治める」

これを聞いた信長が大声で笑いだした。



「その通りよ。末生り瓢箪のような顔をしおって、総て見通しておるではないか。だが、正親町め二度も讓位を拒みおった。光秀、おぬしであれば何とする」

「はっ。まずは甲斐の武田、続いて西国を滅ぼせば、朝廷も殿のお心のままに」

「珍しくも心地良い事を申すな。光秀、おぬしは雅とやらを好み、朝廷とも氣心が通じ合う男。余の心のままとは…… 解せぬな」

光秀の左の眉毛が微かに動いた。

「何か裏があるのであらう。有体に申せ」

「いえ、全く他意はございませぬ」

青筋を立てた信長、真っ青な顔で、

「嘘を申せ！ この朝廷被れが！」
表情を変えずに蘭丸が言った。

「殿、そろそろ、お濃様の処へ……」

これを聞いた信長、平伏する光秀を見下しながら立ち上がり、部屋を出ようとすると蘭丸が小声で、

「日向様、殿の氣性をお判りのはず」

と苦々しげな顔で光秀に声を掛け、信長の後を追おうとした。すると信長が光秀を振り返った。その顔は、普段の顔付きに戻っていた。信長、笑みまで浮かべて、

「勝頼とは長篠にて戦う。駿河殿と丑にな。おぬしも心して掛かれ。良いな」

光秀、平伏したまま、

「ははー」



と静かに答えた。
蘭丸が、また顔をしかめた。

二

金色に輝く部屋。此処は、安土城天守台にある黄金の間。

天正十年五月十七日。上座には信長が機嫌よく座り、その正面左に家康、右に秀吉、向かいに光秀が畏まっている。

幾つもの食膳が並び、皆、箸を動かしている。離れた所に蘭丸が座っている。

「これで甲斐武田も終わった。駿河殿の活躍、目覚しいもの。礼を言っ」

会釈した信長に向かい、家康が丁寧な頭を下げた。

「猿、四国攻めの途中でありながら大儀であった。共に駿河殿をもてなしてくれ」

秀吉が、にやけた顔を前に向けたまま、頭を下げる。

「光秀、流石じゃ。堺、京より取り寄せたる山海の珍味。実に旨い。のう駿河殿」

家康が笑顔で頷き、光秀に顔を向けて軽く頭を下げた。光秀は、家康以上に深く頭を下げた。

「猿には勿体ないほどじゃ。おう、里芋の炊き合わせがある。猿、喰ったか」

秀吉、小鉢を持ちあげ、箸で里芋を掴もうとするが、わざとらしく芋を落としてしまう。漆塗りの床を芋が転がっていく。その芋を四つん這いになって追い掛ける秀吉。芋を手で掴み、口に放り込んで猿のように手で頭を掻いた。



大声を上げて笑う信長と蘭丸。家康は作り笑い。光秀は、苦笑し
げに秀吉を睨んだ。

三

清々しい朝の光が安土城の天守台を照らしている。
天守に目をやると信長が欄干に手を置き、遠くを見ている姿があ
る。傍には光秀と蘭丸が片膝を付け、座っている。

「家康變応、見事だった。光秀、いよいよ西国攻めじゃ。おう、ど
うだ、その前に遠乗りでもせんか。実に良い天気だ」

「ははー、有難き幸せ」

光秀が恐縮しきった顔をする。

「何とした。強張りこらりおって」

「高々五百石取りであった私めを、このように……」

「何を女々しい事を。猿を見る。あやつは百姓だった。要は如何に
役に立つかだ。身分など関係ない。蘭丸、支度せよ」

光秀と蘭丸が頭を下げる。

四

満々と水を湛えた琵琶湖。湖畔を信長、光秀、蘭丸、近習たちの
騎馬姿が走っていく。

五

安土山の頂上で床机しよまに座る信長と光秀。傍に蘭丸と近習たちが片
膝を付いている。

「馬にて頂まで……心地良い疲れじゃ。腹が減った。蘭丸、飯



じゃ」

蘭丸が慌てて、頭を下げながら、

「殿、面目なくも眞前には城に戻られるものと思っておりましたゆえ」

「なにー、戯けが。余は、この場にて握り飯が喰いたい。急ぎ持っ
て参れ」

蘭丸と近習が話をしていたが、近習が走り去る。

「日向守光秀、余も雅を心得ようと思つてな。今日日きょうびに至つても、
朝廷には余の事を尾張おつけの虚けと、陰口を叩く者がおるそうじゃか
らな」

「お言葉ながら、そのような諛言まんげんの如き事を言う者はおらぬはず」

「居ても良い。いすね連中は余に跪ひざまづく。だが、しち面倒な事を言
う輩だ。朝廷は光秀に任せる」

「はっ？ 殿、それは如何なる事で……」

「関白太政大臣よ。おぬしの役だ」

光秀、驚いて顔を上げる。

「東国は家康、西国は秀吉に任せる。両名は征夷大將軍じゃ。どう
だ、新たな日本国が出来上がる」

と言いながら立ち上がった。

「殿、如何なされました」

「催した」

信長は、琵琶湖を眺めながら小便を始めた。

「光秀、雅な連中は立小便などせんのだらうな。哀れなものよ、こ
のように爽快なるものを」



と大声で笑い出した。

——いずれは上皇になり、朝廷を、更にはこの国を治める男が、家臣の前とは言え、このように立小便とは……

信長、体を揺すって振り返るが、小便が手に掛ったのか右手を二、三度振った。それを見た光秀が顔を曇めた。蘭丸も信長の仕草を見たが何食わぬ顔でいる。

信長が床机に座ると同時に、汗だくになった近習が竹皮の包みを手に走ってきた。片膝を付き、包みを蘭丸に渡した。蘭丸は丁寧に包みを開け、信長に差し出した。中には小振りな握り飯が四個。信長が左手に包みを持ち、右手で握り飯を掴み、口に持っていき、喰い始めた。

「おい、実においし」

信長、二個めを掴んだが、ふと蘭丸を見た。

「おう、蘭丸、そちも喰いたいだろう」

と右手に持った握り飯を蘭丸に差し出した。蘭丸は微かに顔を曇めたが、

「有難き幸せ」

と頬張った。信長が三個目を喰った。

——何と、あのように忠義面しておって。主君とは言え一物を持ち、小便が付きし手で渡された握り飯を旨そうに。小姓とは陰間も同然……。蘭丸も哀れなものよ。



「おう光秀。おぬしも腹が減っているであろう。もう一個ある。喰え」

と握り飯を右手で持ち、光秀に差し出した。ギョツとする光秀。顔から血の気が引いていく。

「如何した。さー喰え、旨いぞ」

光秀、体を硬くしたまま動けないでいる。信長の顔に見る見るうち青筋が浮かび上がってきた。

「青瓢箪、余の握り飯が喰えんのかー」

と立ち上がり、光秀に近付いたかと思うと、強引に光秀の口に握り飯を押し込みだした。蒼白になった光秀、握り飯を呑み込もうとしたが、ゲーツと吐きだしてしまった。

「戯けが！」

信長、大声を張り上げ、扇子で光秀の頭を強かに打ちすえた。蘭丸が笑った。

「雅も良いがな、握り飯も喰えんような男になる。我らは武士。兵糧攻めに遭えば何でも喰わねばならん。襦を締め直せ！」

無言で土下座する光秀。言い終わった信長の顔は元に戻っている。

「余は、上洛し西国に向かう。光秀、おぬしも急ぎ坂本に戻り、心して出陣の支度をせよ」

信長と蘭丸、近習らは土下座したままの光秀をその場に残し、騎乗してその場を去った。

ゆっくりと顔を上げた光秀。蒼白になり表情のない顔。顔から一筋の血が流れた。



六

丹波亀山城、五層の天守が篝火かがしほに浮かび上がっている。
天正十年六月一日の深夜、城内の広場の一段高い処に松明に照ら
され、真っ赤な顔の光秀が立っている。光秀の前には、松明を持っ
た大勢の武装した武士たちがいる。光秀が大声で叫んだ。

「敵は、本能寺にあり！」

オーツ！ と掛け声を上げる武士たち。

七

真っ赤な炎に包まれ、炎上する本能寺……

天正十年六月二日、轟音と共に本能寺が焼け落ちた。

(了)

